◇講演◇

このごろの子どもと家庭

～いろいろの実例を中心にして～

森田宗一

かれこれ二十七、八年になります。私は問題の少年とか非行少年といわれる人たちと長いつきあいをしてきました。少年裁判官というのが私の本職ですが、同時にひろく青少年、子ども、家庭の問題にはいろんな面から関与してまいりました。また私も人の子の親でございまして、しがない親の稼業もしております。

私とお茶の水女子大学とは、これも長いえにしで、倉橋惣三先生との出会いにはじまります。それは三十何年も昔のことでございます。そうした縁で、家庭教育などという講座をうけもっております。

はじめに

遠慮なく申しあげることがいくつかございます。その一つは、このごろの子どもと家庭、親子関係、親の姿勢、生きざまについてです。一般にインテリなどと呼ばれる家庭にどうでもいいことをあれこれ細かく気を使いすぎ、これとこれだけは許しがたいということにすっぽぬけがあると思います。いわゆる非行少年、問題児の生活史を見ると、なまじ親がインテリで物に恵まれている家庭に、何か大事なことが欠落し、つちかわれていないと思われる例が多いのです。〝気はやさしくて力なし〟と私はいつも彼らを愛称をもってよんでいるのですが、〝力〟ということが問題で、これは幼少時からの人間関係の中でつちかわれるべきものがつちかわれていない。そこに問題があると思います。

少年事件を処理するには、教育的観点を中心に、よろずのことを調査するわけです。生活歴、家庭環境、特に彼らの性格などを調べて、それにもとづいてその処理をきめるわけなのです。家裁の調査官や鑑別所の先生から、親もあれやこれやと聞いているはずなのに、さて処方箋を書く審判廷で親がよくいう言葉は、〝家の子にかぎってこんなはずではございませんでした〟。これは聞きなれすぎている言葉です。時には〝何不自由なく与えておりましたのに、何ということでしょう、できそこないめ！〟ということをいう親もあるのですね。そしてそういう子にかぎって、〝おれ一人でこうなったんじゃない、でかされたんだ〟と思っている。そんなことをいわせておいていいとも思いませんが、どうも幼少時にさかのぼりますと、〝出かされた〟という方が正しいように思います。そして、彼らの未来を開くために、おくればせながら十数年をとり返すべく、母子の再会の最初からボタンのかけちがいである、少しずれていたということを指摘するのですが、わかってもらえない。しばらく家庭から離さざるを得ないのは、こういう親子関係の自己省察のない場合にあるんですね。

出会い

人生は出会いということですね。出会いとわかれの連続でしょう。このごろのケースに著しい傾向は、まことの出会いがなく、本当のわかれがないことです。過保護というのもその現象の一つだと思います。もう十五、六歳になった非行少年の場合もそうです。親子ベッタリで本当の出会いとわかれがないのです。幼少時からそうですが、十代になった現在でもなおかつそうです。今の時代に子どもを育てるのに、親も悩み、いかに難渋しているか、政治や社会、（政治のことは時期が悪いから申しあげませんが）の犠牲者であるともいえるかもしれません。しかし問題を家庭にかぎれば、やはり問題は親にあり、親子の出会い、つき合い方の問題です。十五、六歳の少年が立居、ふるまい、の基本ができていないのです。母親への依存が目立っている。こちらは、ヤングジェントルマン、レディーと思って話しているのに、ウンでもないスンでもない。イエスとノーの返事もよくできない。まるで幼稚園、小学校の応答やしつけの訓練の場面なのです。この年齢ならこの位のことがこういうふうにいえなきゃ、というような、人生の九九というようなものができてない。そのくせアフリカの最南端には、どんな島があってなどということをきけばこっちよりよほど知っている。そこでドアの入り方から〝やりなおし！〟というのです。それが

少年審判廷の光景の始めです。

そういう少年のお母さんにかぎって、それを当り前のように見すごしている。つまり十数年の最初学歴というべき家庭で幼少時にしておけば何でもないことがしてない。その基本ができていない。そういう子どもに、幼稚園でも小学校でも中学でも、十分な行動のしつけをしていないみたいですね。そのまま大きくなってついに高校になり、大学生になったという若者たちです。今思い浮かべているある事件の少年たちの生活史も、まあそんなふうでした。

子どもは家庭に生まれ育ち、まず母親と出会い父親や家族と出会って、人間らしく成長いたします。しかしやがて別れのつらさを感じながら（とくに母親は）、独立人として成人していくのです。三歳児ころからそういう出会いとわかれの体験をつみ重ね、十代の終わるころは、社会人として新しい船出の必要があるわけです。乳幼児の時は、濃密な出会いが大切でしょう。愛撫とか何くれとない世話など。しかしいつまでも親の気持ち（本能）のままでは、子どもの本当の成長ははばまれ、スポイルされてしまいます。わかれのつらさの実感の中に人間の教育があるのですね。

言い上手・きき下手

このごろの子どもの特徴はいろいろあります。二年おきぐらいに、子どもの様相はかわっているといえましょう。いちじるしいと見えるこの数年来の特徴で、年毎に強くなったと見られるひとつは〝言い上手だがきき下手だ〟ということです。なかなかうまいことを子どもはいいます。作文とか俳句だとかは大人の世界に対するユーモラスな痛烈な異議申し立てであったり、観察であったりする。そういう、表現することは非常に感心することが多い。しかしあまり感心しっぱなしではいけないと思います。言い上手の反面きき下手だ、人のいうことをよくきいてそれに対処するということの練習ができていない。聞き上手はよろず物学びの始めです。それができていないということです。子どもは母親と出会っているうち、よく聞き、耳をそばだてています。だんだん聞いていて口まねや、練習して言葉を覚える。その言葉によって考えることを学び、行動の基本を学を学ぶわけです。つまりきき下手であるということはそれだけ前頭葉が発達しないということであり物学びはおくれるということになるわけです。

ところがこのごろきき下手が多い、きく練習がない。その原

因を考えてみますと、いわゆる情報過多ということが一つある。現実にはテレビとかいろんなことがありますが、同じ環境、条件の中でもきき上手になる子もあるということから考えますと、やっぱり家庭での親の態度、子の心がまえでないかと推論できるわけです。つまり親が、とりわけ母親がいい上手だがきき下手だというところの子どもはきき下手で、素質はいいのに何ごともうまく進歩しない。小学校へ入って学習不振児にもなりかねない。人間性の基本を培うこと、つまり前頭葉を養うことを忘れている。よろずきき上手の練習からという教育の基本がおろそかになっているのです。人間をつくるしつけとか訓育とお勉強とは別のことだと考えてる、今日の教育の間違った常識の中に、いかに子どもがゆがめられているか、お母さん方はまたそういうムードの中でいかに無駄な苦労をしておられるか。なまの事実が示しております。

子をもって知る子の恩

〝子をもって知る親の恩〟ということわざがあります。しかしほんとの親の実感は、〝子をもって知る子の恩〟ということだと思います。子どもによってどんなに親は人生を学ばされるかわからないということです。

私の今日扱ったある非行少年ですが、ずいぶんいろいろないきさつがあって、このごろやっと落ちつきました。お母さんはこの一年で四キロも肥ったと喜んでいい顔をしてました。一年前は四キロやせてたわけです。骨身をけずる親の思いだったわけです。そこで私はいつも少年たちに、せめて親をやせさせないように、あるいは「子をもって私はよかったなあ、生きがいがあったなあ」と感じさせる子になりたまえ、というのです。「子をもって知る子の恩だったなあ」と親に実感させる。それこそ大変な親孝行だと申すのです。よく考えれば、ほんとに子を持ち子とながいつきあいをして感ずるのは子の恩ということですね。

また、古い格言に〝親の心子知らず〟という言葉がありますね。親の気もしらないで、といった例がたしかにあります。しかし、いろいろな実例を見ますと、「子の心親知らず」ということの方が多いと思います。子どもの本当のニード（願い）を知らず、親の思いだけで子どもを扱う。「何不自由なく与えてさせてやらせていたのに、こんなことになって」などと嘆く親があります。非行に陥り易い性格を作ってしまった子の本当の心知らずが多い。動物は、自然が欲望には止めをしているものですが、人間はそれを小さい時から練習せねばならぬ、どう処理

するかということを学ばなければならない。それが人間の本当のニードであり、教育の基本です。そのまことの育つ者の心を知らねばならない。つまり「おあづけ」の味が大切なのです。そのことが忘れられている。お預けなんて今の学生にいいますと、銀行へお金をあずけることかと思う（笑い）。そうじゃなくて欲望と物との間に距離をおいて待つこと、人にゆずる心、ともに分け合う、そういうことをいうので、これこそまさに人生の基本の九九の一つだと思うのです。今日のような消費社会においては、そのことを家庭でこそ、幼少時の教育でこそしないでどこがしてくれるのか。もろくも消費社会の中に流れてしまう。それが日本人の現在の姿なのではないでしょうか、明日の日本は危い、と私共が思う一つの理由なのです。〝子の心を親知らず〟という方がむしろ真実ではないかと私はいいたいのです。親の心子知らずも困るけれども、公平に科学的に見ますと、子どもの問題の中では子の心親知らずという方がどうも真実のようであります。

母乳栄養の意味

実例に入る前に、この道の権威円城寺宗徳博士（九大の学長をなさった小児科医で、幼児教育の先達である方）がある座談会で母乳と人工栄養のことについていいことをおっしゃっているのであります。「母乳は練習しなければ出ないものだ。よろず生まれること、物事にはいたみがあるものなのです。最初はいたいし、吸わなければ出ないし、根気がなければ出るものではない」そう言われるのです。そういうふうにできているんです。

ポルトマンという人の学説によれば人類は早産しているという。何のためか。それは人間性の基本を親子の出会いの中で学ぶためだという。つまり早く出すぎているのです。いろんなことを練習しなければできない、その練習の中に人間性の基本の最初学習があるのです。「おっぱいが出ないからといってすぐやめちゃったりする。一カ月、二カ月やっている内にだんだん出るようになるのに、待つ心がない、これが人工栄養の多い最大の原因だ」と円城寺先生はおっしゃってます。おまけにこのごろは「おばあさんの声援まで加わって、大急ぎでミルクを買ってきてのませる、すると子どもは出にくいお母さんのおっぱいを根気よくすってのむよりもらくなミルクの方についてしまう。人間は安きにつく人のならいなのです。そして出るべき母乳はますます出なくなってしまう。それが母乳栄養減少の大きな原因だ。子の心親知らずがたくさんあるのであって、子をし

ていわしむれば、〝お母さんたちあわてなさるな、もう少し私に吸わしてくれ、吸い出してみせる〟というのでありましょう。こうした、子どもの内にある、母乳を吸って生存しようというすばらしい力を私たちは信じて育てていくことが、まず必要である、このことこそ育児の基本なのだ」。そう言われる。これはおっぱいのことだけじゃないと思うのです。さらにいろいろ教育的なことに関連し、つながっていくわけです。

父親の出番

身近な実例に入りたいと思いますが、あまりにも多くのことがありすぎるような気がいたします。焦点を少ししぼっていきたいと思います。

子どもが小学生ぐらいのお母さんたちの悩みといいますと、まず勉強のことですが、このごろは自閉的な、けんかもようしない、がき大将などという性格の子がない。山へ連れてっても、野原へつれてっても遊ぼうとしない、どうしましょうという相談がよくあります。

それから、これは小学生ですが、小学上級、中学ぐらいになると、父親が出番をしてくれない、という。何といっても母子関係というのは最初の出会いですが、幼稚園、小学校下級生ぐらいまではお父さんは脊景、間接で、お母さんが直接責任者、いわば最初学歴の園長です。お母さんを通じていろいろなことを学び、時々お父さんが講師みたいな役をする。あるいは私立学校の理事長みたいな形の機能はあるわけです。ところが中学生くらいになると、もうお母さんでは間に合わなくなる。お母さんでは足りないというのではなく、父と出会いたい、胸をかりたい、人生を生きていく父親がこういう時はどういうふうに考えるか、社会はどうなのか。時には、いけないことはいけない、社会ではそんなことは通らんぞということを親からききたい知りたい学びたい。これが子どものニードなのです。ところがお父さんがさっぱり、忙しい忙しいと逃げたり、自信がない、よきにはからえ女房よ、（笑い）そんなことで父親が出番をうけもってくれない、ということは真面目なインテリの家庭などにえてして多い。

このことについては「婦人の友」の六月号で、〝家庭はどこへいくのか〟〝不安定なこの時代に親子関係の根元を問うてみよう〟というような座談会をいたしました。話がひとわたりすみました時に、出席者の中の母親代表の方が、まってましたとばかりいったことがまことに印象的でした。このごろの家庭の中での父親のあり方、とりわけ男の子の場合に非常に悩みが多

い、とご家庭のことをいろいろとおっしゃいました。こういう時に父親が出番をしたらどんなにやりいいかと思うのに、出てくれないもんだから、ついいらいらしたりしてうまくいかない。ということをのべられたあとで、〝第一私たちの年代は、父親としての出番をしてくれない、娘や息子との出会いをしない、そういう夫をただ見ながら、気をもんだり、期待しております〟実際のところ、息子を叱ろうと思っても、脊が高くなっていて、仰向いて叱らなければならない（笑い）。そういう時にお父さんが出てきてくれたら、あとはこちらがやるのにという気持ちなのでしょうね。そのあと中学の女の先生が、〝そうなんですよ、学校教育でも小学校上級から中学となりますと扱いいい子か、非常に頼もしい子か、ということは父親とのつきあいがどうなっているかということでわかるんですよ〟とおっしゃってエピソードを一つお話しになりました。それはこういうことです。

生徒たちが大変緻密に伊豆一周のサイクリングの計画をたてた。計画は大変よくできていましたが、一応その親に了解だけ得るために電話をかけた。ところが、電話口に最初お父さんがでてきてもさっぱり用をなさない、〝学校のこと、子どものことですか、それじゃ家内とかわります〟（笑い）。そういう時家内（母親）の方が出ると話が長くて、持物がどうだとか、どんな恰好がいいですか、ということになるでしょう。お母さんがそういうことを心配なさるのは、母性本能というか、らしいと思うんです。母親が〝そんなことはあっしにかかわりのないことでございます〟などといったらどうかと思います（笑い）。しかし今はそういう問題でない。お父さんが出番をうけもってほしい場面なのですね。

非行少年の場合にも、父親が出番をうけもたない家庭が多いですね。中学生（あるいは小学上級生）ころから以後の子どもについては、どのように父親の役割を果たさせるか、たしかに今日の重要な問題だと思います。

父子関係のむずかしさ

親子の関係、そのつきあい方を考えると、最初の一年は母親の体内の延長であるといえます。そのころはお母さんとの出会いが主でしょう。やがて次第に父親とか兄弟とか家庭内外のいろいろな人との出会いをして子どもは成長するのです。「お母さんはいてほしいなくてならぬ人だけれど、いつでもいなければならない人でなくなってくる」とある中学生の日記に心にくいばかりの表現がありました。お父さんの出番になってくるわ

けですね。女の子にとっては最初の彼氏であり、男の子にとっては最初の先ぱいであり人生の先達であり、そういう人と出会いたいだろうと思います。

母子関係はいわば、大地にまいた種子が芽を出し、移植されて、大地から分離して成長していくものです。セパレートしながら再会し、母子が互いに成長をしていく。親から学び親も子から学びながら、母子わかれの辛さがあるでしょう。いたみもあります。その象徴は陣痛です。あるいは、三歳の時、十五、六歳ごろには「私より好きな彼女ができた」と眼をつりあげるお母さんもあります。寂しさもあるにしても、見守る必要があると思います。

男親にはそういうものはありませんね。おれよりも好きな彼氏ができた、いいじゃないかとまず思うのです。父親と子との関係はかなり精神的なものではないかと思います。母子というものは生物学的生理的な基盤がある、大地性とでも申しましょうか。わかれのつらさを感じながら、子の成長を見守る忍耐をもって再会をするかどうかということが、非常に大事な青少年期の母子関係だと思います。

形成される父子関係

法律には、離婚して六カ月たたないと再婚できないということになっている。ちょっと妻に不平等のようですが、これは生物学的なことから、子の父性を混乱させないための知恵です。同じようなことが男性の方にもあるのです。〝婚姻中の妻がみごもって生まれたるは、夫の子とみなす〟と民法にある。みなされちゃってるんです。本当に自分の子かどうか証拠はない。子の母を信用しているわけです。その信用という精神の上に、父子関係は次第に形成されていくのです。

「おれの子だ」という保証は、精神的に〝おれの子に違いない〟とその母親を信用してるという精神作用だけなんです。九九・九パーセントは信用しても一まつの不安というものはあるものです。そんなことを男どもは時々冗談まじりに話すことがあるものです。父子関係というのはこのように形成されていくものなんです。したがって肉親の親子といいますが、母子関係ではお腹をいためたかいためないかというのは重大な問題になるのです。大地と、そうでないところから生まれてきた子どもを違う大地で育てるということは、科学的に重大な事実だというのです。父子関係でむしろ大事なことは、生まれてからだんだん父と子が接近し出会い、つき合っていく間に、九九・九パーセントの残るあいまいな所も確たる事実として形成されて

いくものです。子どもの方だって初めは父親とは妙な人間に見えるでしょう。たびたびの出会いの中で、これは母親のただならぬ相手だ、父親というものだということを知っていくわけです（笑い）。これが全然離れっぱなしだったらどうでしょう。「藍より青し」なんかは理想的に描かれていますから、あの子は全然お父さんを知らないんだけれども、お母さんを通じて、お母さんが写真を出したりいろいろしてるからお父さんお父さんていってます。それは一種の教育ですが、子どもの生理的、心理的実感としては、離れっぱなしのお父さんをお父さんと思うはずはない。思うのは、お母さんがどう思っているかの反映につながってます。むしろ接近しつき合ってくれる父親を、好奇心ながら、ああこれ、父っていうものはこういうものかということを確認して形成されていく、そういうつきあいというものは非常に大事なんですね。

幼少時には父子関係というものを形成作用として、そういうつもりつもったものがあって出番というものができるわけです。そういうものを全然ゼロにしていたら、急に中学生になったからといって、さあ出番だ、出会いましょう、なんていってもそういうわけにはいかないし、息子、娘の方だって準備段階がなくてはそう思うようにはいかない。むしろ不信感、お父さんがいないことになれてしまう。するとお父さんにかわるものを先生に求める。それも自然ですが、先生で与えられない場合が、残念ながら今日の教育においては多い。中学生など殊に男の子が、大事なことを誰に相談するか、「先生」というのが非常に少ない。ではお父さんはというとこれも少ない。どうも出番をうけもっていない。よきにはからえということになっている場合が多いようです。お母さんだけでは用が足りない年ごろになって、父の出番がなく、先生が、それに代る、または人生の先輩としての役わりをもたない。すると深夜喫茶とかああいう所に出入りするあんちゃん、やくざの親分とかいう人の所に長居をするようになる。「あの連中は何がなくても人情がありますよ、パンチがあります。それが魅力です」そんなことをいう少年が少なくないですね。当たらずさわらず、見て見ぬふりの無関心みたいな親子、師弟の関係。そんななまぬるい芯のない人間関係からさまざまなひずみがおこっているわけです。まず「おやじお袋の味」の復活ということが肝要だと思います。

―ぼくは六つになった―

ここである美しい詩の一節を紹介いたしておき、このことの結びとしたいと思います。それは周郷先生の名訳があるのです

が、イギリスのアラン・アレキサンダー・ミルンという人の詩です。ミルンという人は、世界中によまれている有名な「熊のプーさん」の著者です。その人が〝ぼくは六つになった〟という詩を書いています。ゲゼルという心理学者によると、人間は十五、六歳になるまで、人類がこの世に生をうけてから十教万年の一万年ずつを体験するものだ、だから三歳ぐらいまでは原始生活時代、大いに原始生活を体験させよという。その六歳ごろまで（いわば人類が六万年ぐらいたった時代でしょうか）、そのころまでの子どもの正体とニードを実によく一行ずつでいいあらわしていると思います。今の教育に、この単純と見える一行ずつのことがわかっていない。実現されていないのです。昔の親の方がよくわきまえていたと思います。五十年前のわれわれ子ども時代の素朴な親が、そのかなめの所だけはちゃんとわかって子どもを育てていたのではないかと思うふしがあります。その詩は次のようであります。

一つのときは
なにもかもはじめてだった。

二つのときは
ぼくは　まるっきりしんまいだった。

三つのときは
ぼくはやっとぼくになった。

四つのとき
ぼくは大きくなりたかった

五つのときには
なにからなにまで　おもしろかった。

いま六つで
ぼくはありったけ　おりこうです
だから　いまでも六つでありたい。

一つのとき、胎内延長の一歳時、何もかも始めて。始めてということは非常に大事なことですね。

二つのとき、いろいろなことを、今度は一人の個体として経験できるわけです。ところがよろず新米でうまくいかない。そういう場合、親がどういうふうに新米に対処するかというのが

大切です。芸事のおけい古を考えてみるとよくおわかりになると思う。新米はどうせ失敗したりうまくいかないでしょう、だから新米はならいに来ているんです。それを二つの、間違った態度は、自分の方のます目で〝だめじゃないですか、そんなことでは〟と新米をけなしてそのあげくに〝この間弟子入りした誰々さんは来た時からちゃんとそんなことできます〟。こんなことをいわれたら、〝どうせ私はそうでしょうよ〟とか劣等感をおこすか、ひがんでしまって新米から成長していかない。これが育て方の間違いで、〝三つほめて一つ叱れ〟ということわざがありますが、ほめて引きあげてやらなきゃ新米はだめになります。

そうかと思いますと、新米のさせるっ放しにしておいて、いつまでも指導をしない。時には手をとって親切に導いてやらねばならない。これを今の親にあてはめ、教師にあてはめた時、二つの大きな間違いがうかびあがってまいります。切捨て教育エリートばかり珍重し、人間を育てようとしない。ちょっとおくれてるか、もたもたしているとおいてけぼりに切り捨てられてしまう。これは管理体勢の切り捨てごめんの教育。そうでないと干渉し過ぎの過保護、ということになります。

けさも、私の家の近くに幼稚園がありますので見ていますと、子どもたちは道をまっすぐいかずに土手にあがったり走ったりするんです。お母さんより先に友だちと行ったりしようとします。〝あぶないあぶない、およしなさい。お母さんと手をつないでなさい〟〝さっきいったでしょ、お母さんと手をつないでいくの!!〟まるでサル廻しのサルです。ころんだりすると、〝それころんだ、だからいわないこっちゃない〟。ころんだりおきたりするからいろいろ覚えていくんです、そのかわり新米のころは手をちょんぎったりする力がないから大丈夫です。

そういう練習をしないでいると、やがて行動半径が広くなって体力もついた時に、命にかかわるような事故をおこす、事故をおこしやすいようになる。危険を、危険として対処できない子どもは、大体新米を扱い間違えたいわゆる過保護というか、先廻りして全部危いものをとり除いちゃう、そういうふうにした子どもで、三年後五年後の実例がたくさんあります。ぼくはまるっきり新米だったという発言はすばらしいと思います。

三つのときは　ぼくはようやくぼくになった

これは大変すばらしい。原語は　I was hardly ME　とミーが大文字になっています。これは意味深なんです。やせてもかれてもおぼつかないながら私でありぼくである。「三つ子の魂百まで」という。親も奪うべからざる子どもの魂の世界、

聖所　holy　place　がある。その前にわれわれはたたずんで、ようやくぼくになった、おぼつかない子どもに、畏れを感ずるところから、第二の教育が始まると思います。同時に、親の生き方、横顔、うしろ姿、とよく倉橋先生はいわれましたが、親の一番大きい影響がそこにあります。

四つのときは　ぼくは大きくなりたかった

五つのときは　何もかもおもしろかった

ギャングエージといいますが、おもしろくてたまらない時代です。男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく、いろいろな遊びをしたりけんかもしたり、つまり成長してやまざるたくましい力を（現実にはそうでない子もできていますがこれが自然の姿です）もっておもしろくてしょうがない。

今は六つで　ぼくはありったけお利口です。

だからいつまでも六つでありたい

自然的には、もうこれでこのままで終わっていいのだが、人生とは、人間の社会生活とは、これから始まる。そこで六歳になったらおおやけの教育に入れる。親だけでは足りない。学校教育　は、この時から始まるというわけです。六歳児までの間に、〝おぼつかないながら私であった〟という三歳児を真中にして、ぼくはもうありったけお利口ですという時から、社会生活に適応していく人間形成が始まるといえましょう。

私ども非行少年とか、問題児、また教育相談などに登場する臨床の実例を見て、大きな社会問題だと思います。しかし、にもかかわらず、六歳児ころまでの家庭のあり方、親子のつきあい方、その間に形成された性格、人生の九九、情緒、基本のものが身についているかどうかということが勝負の始めだと思います。したがってもう一度、一歳児、二歳児のころにかえって総反省をして、親も子も、せめてお母さんと娘、息子とが、ともどもにあすを見すかして今を考えなくてはならない。昨日まではかりに全部失敗でも、今日から明日から、というのが教育の姿勢だと思います。いろいろな臨床の実例をみますと、まさに幼少時の親子関係の中に大きな問題をもっているということは否定することはできません。いかに社会の影響の大きい今日でも……。

あの連合赤軍などというとんでもない事件でも（新聞などでは家庭をとがめすぎていますが）、やはり何か共通の問題が家庭にあったともいえましょう。一人の親は愛知県の著名な教育者です。〝死ぬのはたやすい。しかし自分は生きて子の負い目を背負って、親とはいったい何だ、ということを耐えていきたい。そして願わくばせめてもう一度、誰か一人でも息子が帰ってき

たならば、もう一度あのころ、子どもの中学生のころ　なってみたい。そのころは自分は学校のことが忙しくて息子たちと出会わなかった。そのころに帰って見たい〟といった大変素朴な、悲痛なことを世に発表しておられます。

これは極端な事例ですが、もう一度この詩の意味を考え直していただきたいと思います。

悲しい事件二つ

この間私が扱いました事件があります。高校一年生の息子が母親をナイフでさして即死させ、それをとめた姉さんを大怪我させるという事件がありました。

どうしてこんなことがおこったかというと、ほしい物を買ってくれなかった。お金には余裕がある。それがくせ者なんです。子ども自身も三十六万円貯金してる。そして自分の物はおれの物、親の物はおれの物というような思想なんです。そして日曜日にお母さんにねだったわけです。兄弟や友だちが少い、これも問題なんですが、そういう子どもは生き物を友だちとしたいというのは人間の自然的な姿ですね。それで何か名のある犬をほしがったわけです。それと自転車、それもオートバイのようなもの。しめて八万円くれ、即刻くれといったのです。〟そんなことできない、あんただってたくさんもってるんだから、明日銀行へ行っておろしていらっしゃい〟というと〟今、ほしい、今、くれ〟といったきっかけで、「おれのいうことをきかないお母さんだからナイフでさし殺してしまった」というのです。何という恐ろしいことでしょう。行偽は異常だし理解しにくいくらいですね。しかし、それもさっき申したように、おあずけがあったかどうかという素朴なことに帰するわけです。これは極端な例ですが、これに近い一触即発の例は実にたくさんあるのです。

逆に子どもをつまらぬことで殺してしまう親もずいぶんある。動物の世界にはないことだそうです。この間も新聞に、子どもが泣きわめきやまらない。お父さんにもおばあさんにもうるさいといわれて、頭に来て、子どもを団地の四階から落として殺した。あるいは首をしめて殺したということをみました。これも極端なように思われますが、よくある例です。育児ノイローゼです。子とのつき合いをしらず、あるいは待つ心がない。子どもが泣いているニード、願いごとの意味を、実感していない。そういうことが、子どもが親を殺し、母が子を殺すという異常事につながります。そこまでいかないまでも、都内の病院などで蒸発ママというのがずいぶんふえてきてます。生むだけでも

大変、あとはよろしくたのむ、というわけです。

それから、幼児から小学生、上級生になりますと、いろいろな社会の悪条件の中で、公園もない、遊び場もない中で子どもは抑圧され、そういう中で子どもはゆがんで、もやしっ子とか、〝気はやさしく力なし〟とだけではいい表わせない子どもが登場してきています。これはやはり家庭ばかりでなく、教育の場の荒れ方、世のすさび、子どもというものに必要な物が与えられていない、そういう状況の中で子どもは、もやしなどというのほほんとしたものでなく、何かひねた、小生意気な子がふえています。残念ながら、ちびっ子アニマルなどと呼んでいる人さえいます。

自殺の年齢低下

その現象はゆがみのいろんな行動に現われますが、まずこのごろ、中学生ぐらいの四無主義という、無気力、無責任、無感動、無関心ということがいわれています。人のいたみをいたみと感じ、喜びを喜びとし、欲望を抑制しそれをさらに浄化し向上することができなければ、動物以下になりさがるのです。まさに母親を子どもが殺したり、母親が、泣いたからといって子どもを殺すというようなことは動物は絶対にしない、できない、怪物のすることです。また四無主義といわれますが、さらに悲しいことには年齢低下の現象がみられて、これが小学校上級ぐらいにまでさがってきたということに、「自殺」があります。昨日まで元気だった、元気だったと見えた子に、気のやさしいセンシブルな子に多い、というから余計悲劇なのです。しかしかなり共通しているところはある心理学者の分析ですが、恵まれた家庭で甘えて、欲求不満にたえきれない子どもに多いという。また、死に急ぐ子どもの問題で重要なのは、乳幼児期の精神衛生であると書いている人もおります。子どもはたえられない状況からにげようとして自殺するという西洋の学者の言葉をあげて、精神衛生が大事だ、今日のような状況であるがゆえに子どもの自殺の場合は、周囲の大人、親にも家庭にも非常に責任があるということをいっておられます。ある中学生は、遺書に、親への不満、教師への不満をのべ、相談する人がいなかった、友だちがいなかった苦ちゅうを述べて結んでおりました。ある女子の高校一年生は、けごんの滝に身をひるがえしてとびこんでその遺書には「社会の問題がバリバリと胸をかきむしる」と書いている。しかしその家庭は、ソフトで恵まれた家庭であったという。それゆえにかえってどうにもたえられないと書いて死にました。

こういう例をあげますと、実に今や、あれすさんだ、子ども無視といっていいような状況の中で、やさしく、センシブルな四無でない人間的な気持ちをもった子どもたちがどんなに苦しみ悩んでいるかという現実。そして自殺の多くも、あるいはそれがとんでもない方向へ発足していくのにも、うつ病的な傾向が非常に蔓延しておる。休んでいるような学生などのかなり多くにこの傾向が見られます。そしてそういう子は大体良心的で責任感があるといわれる。少し線が細いけれどもセンシブルな、そういう少年少女がかかりやすい。今日のような状況の中で、悩み一つ知らず、眠れないことなんて一つもないなんていばってる政治家えらい人などは怪物ではないでしょうか。なんていたましいことの多い、〝眠られぬ夜々を涙ながらにパンを味わい、眠られぬ夜々を重ねた人ではなくては人生を語るにたえない〟というようなことをゲーテはいいましたけれど、今やゲーテの時代などからは想像を絶するような悩ましい時代です。

そういう中で、人間的なものをもった若者ほど、死に急がないまでもうつ病になり、あとはずっこけて、自己を叱咤しながらも起きられない。すると親や先生は、急に怠けた、誰か悪い友だちでも出きたのでは、といって道徳的に叱咤激動する。これがかえって彼女彼らをいっそう絶望感に追いやって、ある日ある朝、プツッと糸が切れたみたいにずっこけて谷へ落ちてしまう。死の中へ落ちてしまうという事例が、今日非常に多いのす。

青少年問題の、今一番心痛める例はそういうことです。がき大将とか、やくざ仲間に入ってたくましいことをしている例は、年々激減している。少年院は閑古島がないている。けれども精神病院行き、心理療法を必要とする例がふえてきています。

ユーモラスな出会い

先日新聞に周郷先生が大変良いことを書いておられます。当幼稚園のチンパンジーとの出会いということについて、教育に何かぬけ穴がある、そして自分は人間ぎらいだ、（とこのごろ先生はこんなことをいい出してきていらっしゃる、もともと生き物が好きな方ですが）人間も生き物だと思っていたが、人間は怪物性を示してきているので心やさしき人は、人間ぎらいになって植物や動物好きになっちゃうんじゃないかと書いておられます。もう一度教育は、生き物や草花、生きとし生けるものとの出会いから考え直すべきですね。もちろん人間との出会いが目的ですが、まず生き者とのつきあいから幼児教育を始めなければいけないといっておられます。まことにそうだと思います。

また一昨日かの新聞には、今の子どもと教師は、夜の町では生き生きと眼を輝やかしているが、家庭と学校ではどんよりして、親も教師も無気力、火花の散るような出会いがないという趣旨のことが見られます。また、何か競争意識のはげしい子が友だちを殺して、誰かに殺されたのだと訴え出た、気はやさしくて力なし、もやしっ子とだけではすまされないエリート、何かぬけた少年の事例が報道されています。

さてこういう例を最後に申し上げておわりたいと思います。

それは、こういう時代だからこそ、出会いつきあいの意味を再発見して、わが家にどう表現するか、その中でのびのびとユーモラスな出会いが必要でしょう。同時に、いけないことはいけないとし、何不自由なく欲望のまにまに与えていたのでは、動物以下にもなりさがれる人間という怪物であるという、「おあずけの味」をお忘れなく。もう一度あの素朴な、おあずけの味というのを再確認してみる必要があります。

私共の子ども時代になつかしいふるさとの味、おふくろの味、ああありがたかったなあとあとで思うのは、葬式まんじゅうでしたね。あれ、一人じめしてたべたらどんなにうまいだろうと思うけれども、姉も妹も兄貴も、甘い物好きな年よりもいるとそうはできない。その内に母親から声あり、〝宗一、仏様にあげとけ〟それでおあづけです。すると今度は子どもながら前頭葉を働かせまして、あれいつおりてくるかな、と想像する、これは学問の始めです。大体、親父が帰ってくる三日目、あさっての晩の八時ごろ、その間気になってしようがない。仏様は食べやしないけどねずみがひいたら困る、と見に行ったりする。ああ無事だ、とついでにチーンとおがんだりする。そういうことから牛にひかれて善光寺まいりならぬ、葬式まんじゅうにひかれて宗教心へといったりする。さらに大事なことは、これも学問への道なのですが、どうせわってくうんだな、たてわりかな横わりかな、損はすまいと考えるわけです。さてその当日、母親がさっさっさっと切ってくれる。あ、たてわりだ、二日二晩考えたんですからさっと端を取った、ところが三角学をやってなかった悲しさ、はしは皮であんが少ない。残り物をとった妹の方が小さいけれど皮は薄いしあんがつまってた。平等にわける天才の母にまかせておけばよかった、と思う。おまんじゅうの味はその中にありということを、しみじみ悟るのはあとのこと。

子どものその時に、ああありがたや、母の味、教育の味よ、人生への教育の味よなんてことは思いやしません。やっぱり食いたいな、一人で食ったらどんなにうまいだろう。とがまんす

るわけです。しかし子どものがまんなんてものはすぐ明日へと転嫁できる。今に大きくなったら自分でかせいで十ぐらい一人で食ってしまおう、そう考える。そういう日は、親がまさかと思うほど早くやってくるのです。私は十三の時に親を離れて働いていました。その時に一月働いたお金でおまんじゅうを四つぐらい買ってきて食べました。でも一人で食べたんじゃおいしくないですね。一つ半ぐらいでうんざりしたことを覚えています。やはりああいうのは、手続きがあって、おあずけの味があって、わけ合って比べ合って食べりゃ、ちょっとのがまんだけれど、夢を将来に残して食べた味にまさるものはないと思った時に、ありがたや、ふるさとの味よ、と評価するものではないでしょうか。

今日は消費社会だから、おまんじゅうのことかと皆さんはお笑いになるかもしれないが、これはテレビとかいろいろなことにあてはまるんですよ。私にとってなつかしい幼少時のことをいったのであって、物が変わっても、人間の欲望と対処するという基本においては何も変わっていないと思います。それで今、あえて実感をこめて話したにすぎないのであって、皆さんは、あの話は葬式まんじゅうの話か、とたな上げしないで応用していただきたいと思います。

それから最後に、いみじくも家庭の出会いは、倉橋先生じゃないけれども、正眼の構えの出会いばかりではつかれて精神衛生上よろしくない、親が教育者であるためには、真向きだけではいけない、横顔とうしろ姿がともどもに調和して始めて、親がよき人間を育てる心がでてくる、それは倉橋先生の書かれたもの、話の中にはたびたび出てきます。先生は生涯を育ての心、ま向き、横顔、うしろ姿ということをいってこられました。私は今日ほど、その言葉、その心が回復されるべき時はないと思います。

その、ま向き、横顔、うしろ姿を今日的に解釈するならば、ユーモアの心、余裕です、はばです。ペケ三つだって、七つマルがあるというこころ、夜おそくなってしまって、明日の試験はもうだめかもしれない、しかし合格するかもしれない、朝は〝おはよう〟といってやってくると見る心。それをお母さんやお父さんがまず回復する。明かるい面が必ず物事にはある。きら星のようなものがどんな子にもある。人みなに美しき種あり、ということを見てとって、教育とは、育児とは何か考え直しましょう。はげまし、ほめる、そして叱るべき時にはま向きで叱るのもけっこうでしょう。しかし何よりユーモアなふんいきというものが今日非常に大事なのです。とりわけ日本の父親

は、家庭でさりげない表現をしない、おいしいものを食べてもおいしかったと評価をしない。そういうことがないために家庭がぎすぎす、じめじめしたりする。そしてどうしても母親が多弁になる、母よ、もう少し言葉をおしんで、父親がもう少しユーモアをもって社会の経験でも表現をしたりすれば、大体家庭教育なんてうまくいくんじゃないか。あとは政治とかそういう問題です。ところが母親がどうしてもしゃべりすぎる、それは父親が出番をもたないからです。

ユーモア―子どもの作品から―

最近、〝親を見りゃぼくの将来しれたもの〟とか、中学の先生が生徒の川柳と狂歌をまとめて親に訴えた本が出ました。これはぜひご紹介したいと思うくらいです。実に子どもはよく見ているもんだなあと思います。（まあいい上手すぎるような所もありますけれど……）

父と母　ふつうに書けば夫婦だが　わが家はちがう婦夫だなあ

家庭とは父きびしくて母やさし　それでいいのだ家はちがうが

いそがしいその一言でパパ逃げる

ぼくとママ手を結びあい父を無視

参観日脊中の母の目が恐い

誰さんに負けるなと母つばとばし

味噌汁を朝食べたいに母ねている

（なんて子どもの欲求は素朴でかわらざるものかと思いますね）

耳ふさぐ母たち話すいやらしい

（中学生にもなると清潔感というようなものが皆さんだってあったと思います）

はずかしさ暑さと共に母忘れ

おれ男　少しは気にしろ夏の母

兄、兄とおれは兄貴のあまりかな

姉さんはおきれいですとあといわず

（これは他人がいうんでしょうね、人と比較されることがいかに子どもにとって傷つくかということです）

競争をしたこともなし一人っ子

ママのヒスみんな集まる一人っ子

（一人っ子の悲哀です）

十四年父の無能をふきこまれ　ようやくわかった母のおろかさ　（笑い）

そしてこの本をまとめられた中学の先生はは、親たちにいうことを、表題の下に、まず

〝父は立て〟と書いておられる。父はやっぱり、人生を生きていることを示せ、という意味でしょう。そして〝母はすわれ〟という。母は言葉をおしんで、故郷の山のようにすわって何も一日すわっていなくていいんです。仕事に行く母、勉強に行く母、けっこうなのです。それが、いかにも母親がその家庭に泰然としているイメージをいったわけです。そして「子はのびよ」とある。〝父は立て母は坐れよ子は伸びよ〟です。この本はまさに今日の少し意欲ある表現上手な子どもたちの訴えであります。

最後に一つだけ、ユーモアとは何ぞやということですが、非常に簡単にいえば、影があれば光があるという物の見方。余裕をもって客観的に物を見る。そういうことです。これは大体、マン（男）の物です。女性は真面目ですから、そういうユーモアのある夫と一緒にいる間にだんだん成長してくる。女子学生も一年の時より四年になるとずっとユーモアを解するようになる、それはいろいろな物を見てはばが出てくるからです。

ですから、これから皆さん、最初学歴の園長たる皆さんにしていただきたいことは、子どもたち、殊に男の子には、人の身になって物を考える、明暗をよむ心、ただまじめの一筋じゃなくて余裕のある物の見方、そしてさりげない表現のできるような、そういう教育を今からしていただきたい。そうしますと今から読みます作文のようになると思います。東北の、それほど教育的とはいえない農村の家庭ですよ。すばらしいユーモラスな親子の出会いの姿です。〝ごいつ〟という題からしてユーモラスです。

正月休みの時に父は旅行に出た。父のおとうとの三重県に行った。私は前の晩、ポケットウイスキーを一二〇円で買って父にさし出した。父はうれしそうにサンキューといってケースに入れた。

（この表現がいいですね、東北の農村のおっちゃんがサンキューというからいいんです。洋行帰りのパパがサンキューなんていっても、今の子どもはゲバしますよ。東北の農村の、とりわけ言葉少ないおっちゃんが、出がけに娘の心根をくんで横文字でサンキューといった。ユーモアとはそういうものなのです。その人らしい、たくまざる、マンネリではないものなんです）

父は〝お土産買って来てやるから自分のほしい物は何でもい

え〟といった。弟たちは〝ピストル、刀〟などといっていた。母も〝セーター、セーター〟などとまるで子どものようにいっていた。父がお前も何かときいた時私は何もいわないで、〝お父さん元気で帰ってきてくれるのが何よりもお土産だ〟といったら父は〝こいつ！〟といって頭をおした。

次の日の朝も父は、〝本当にいらないか〟ときき返したが、私は、〝いらね〟といったら苦笑いしていた。父は行ってしまった。実は私は、何か頼めばよかったなあと思った。でも父は案外ふだんから小さい所によく気がつく人だから、多分何か買ってきてくれるだろうと思った。いよいよ父帰る日、私は胸をわくわくさせて迎えに行った。父は私の顔を見て、〝何も買って来ないぞ〟と笑った。私は〝チクショウ〟といって笑った。そしたら父は笑いながらだまって包をさし出した。中味はかわいい人形だった。私は本当にうれしかった。そして父を尊敬した。

子どもが親を好きだといい、尊敬するといい、案外よくみているものだし、長いつきあい、ユーモアなふんいきの中でこそ、横顔、うしろ姿でこそということを、現代っ子が私どもに証明してくれているものです。

おわりに

最後に、大人の、子どもの声の理解の仕方ときいていい詩を、私の大好きな八木重吉の詩をご紹介します。

さて　赤ん坊はなぜあんなにあんあんあんあん泣くんだろう
本当にうるせえよあんあん　あんあんあんあん　あんあん
うるさかねえよ　うるさかないよ
（よんでいるんだよ母さんを）よんでるんだよ
神さまをよんでるんだよ　みんなも呼びな
あんなにしつこく呼びな

私が最後に申したいことは、いろいろよくばりたいことは、あれもこれもおありでしょうがこれだけは一つおとしてはならないという願、願いがあります。それは、必死に求めれば与えられる。子どもはそれで生命を維持するために、ああいうけたたましい泣き方をするんじゃないか。うるせえよと思わないでわれわれも、この価値観が混乱した世の中で、この点と点だけはくずさずに探求しているという物をきめる必要があります。

（お茶の水女子大学附属幼稚園
ＰＴＡ主催講演会）